

21世紀政策研究所
特別対談

日本的な感性を活かした 多様な社会の実現



澤田
純

日本経済団体連合会 副会長／
日本電信電話株式会社（NTT）取締役会長



中島
隆博

21世紀政策研究所 研究主幹／
東京大学東洋文化研究所 所長

対談 (2024年2月2日開催)

日本経済団体連合会 副会長／

日本電信電話株式会社 (NTT) 代表取締役会長 (註)

澤田 純

21世紀政策研究所 研究主幹／

東京大学東洋文化研究所 所長

中島 隆博

はじめに 4

I 目指す未来とその底流にあるもの

5

1 パラコンシステントの概念に至った経緯 6

2 底流にある思い 8

II 関係性の重要性

11

1 近代主体概念から〈Self-as-We〉の関係へ 12

2 文化や社会の見方を変容させる「スイッチ」を押していく 15

III 日本感性と人間観 21

- 1 日本発の概念を提起することの重要性 22
- 2 日本風の感性、情動を共通概念にしていく 27
- 3 環世界をまたぐ技術の研究、そのとき「人間とは何か」が問われる 32

IV 日本発の知の普遍化 41

- 1 ボトムアップで土着的な知の普遍化を 42
- 2 日本から人文学や社会科学とのエンゲージメントを発信する 44
- 3 日本の思想の最大の特徴は「全然異なるものを複合させる」こと 47
- 4 産業界とアカデミアが対話するプラットフォームを 51

V 新しい指標 55

- 1 〈Human Co-becoming〉を測る指標の提案 56
- 2 指標化のための営み 59

VI 「パーソナル」を定義する 63

- 1 IOWN構想の衝撃 64
- 2 「パーソナル」の新解釈の必要性 67

(註) 役職は対談日現在のものです。

はじめに

これまで従来型の資本主義システムのもとで経済活動が行われてきた結果、今日では格差や環境問題、自由民主主義の危機などの社会問題が深刻になってきており、資本主義の綻びが指摘され、さまざまな見直し議論が高まっています。そうした中で、社会や人間はどのような方向に進むべきなのか。21世紀政策研究所では、2021年に資本主義・民主主義研究プロジェクト（研究主幹・中島隆博 東京大学東洋文化研究所所長）を立ち上げ、哲学をはじめとするリベラルアーツの叡智の蓄積を活用しつつ多面的に検討を深めるべく、国内外のさまざまな分野の有識者と議論を行ってきています。

社会や人間はどのような方向に向かうべきなのか、という問いへの答えは簡単には見つかりませんが、日本企業は従来からその問いに対する答えを考えながらビジネスをしてきているはずであり、そのような日本企業の底流にある理念に、いまの社会や人間の方向性を考えるヒントが隠れているのではないかと。本プロジェクトではそのように考え、その理念を中島研究主幹の知見をお借りしながら言語化すべく、今回の対談が実現しました。

I 目指す未来とその底流にあるもの

1 パラコンシステントの概念に至った経緯

中島 澤田会長が執筆されて2021年に出版された、『パラコンシステント・ワールド——次世代通信IOWNと描く、生命とITのへあいだV』（NTT出版）を拝読しました。哲学的に面白い本だなど、一挙に吸い込まれるように読んでしまいました。ここに至るまでには、どのような経緯があったのでしょうか。最初からこの本に書かれているようなお考えをお持ちではなかったのですよね。

澤田 はい。ご案内のように弊社は公共性と企業性の両立を求められる会社で、1990年代の若いころよく同僚たちとそのことについて話をしたのですが、この二律背反を実現するのは無理だというのが一般的な議論でした。私だけ楽天的なので、同時両立させる方法があるはずだ、例えば技術開発だ、というような議論をしたことがあります。

そして2019年に「IOWN構想」を発表しました。IOWN (Innovative Optical and Wireless Network) 構想とは、フォトリクスⅡ光技術を中心とした革新的技術を活用し、これまでのインフラの限界を超えた大容量・低遅延・低消費電力通信ならびに膨大な計算リソース等を提供することができるとネットワーク・情報処理の基盤です。このような新しいインフラには、新しい哲学が必要になると京都

資料 NTTの近年のあゆみ

1985年

電電公社から NTT へ
民営化（日本電信電話株式会社 設立）

2018年

中期経営戦略「Your Value Partner」を発表し、デジタルトランスフォーメーションにより社会的課題を解決して、事業活動を通じた社会貢献を果たすことを目標に設定。

2019年5月

「IOWN（アイオン：Innovative Optical and Wireless Network）構想」を公表

2019年11月

IOWN 構想の実現する世界に向けて、京都大学との共同研究を開始。

：領域横断的な知としての哲学を新たに導入し、京都大学の出口康夫教授が提唱している東洋的自己観をもとに、リアルとバーチャルが融合する世界での新たな世界観の構築を目指す。

2020年

NTT と京都大学との共同研究において、「Self-as-We尺度」を最初の成果として発表

2021年

澤田会長著『パラコンシステント・ワールドー次世代通信IOWNと描く、生命とITの〈あいだ〉』を刊行

2022年

「NTT グループサステナビリティ憲章」制定：パラコンシステントな社会を実現に向け、「Self-as-We（「われわれ」としての「わたし」）」という考えを基本に据えて、企業としての成長と社会課題の解決を同時実現する「NTTグループサステナビリティ憲章」を制定。

2023年

京都哲学研究所を設立

2024年1月

京都哲学研究所設立記念シンポジウムを開催

大学の出口康夫先生^(註1)に言われ、共同研究を開始しました。そしてこの本は、次世代通信基盤IOWNを通じて、どのような持続可能な社会を実現していくべきかについて書いた本です。この本では、「自然と人間」「グローバルとローカル」「サイバーとフィジカル」「利己と利他」といった二つの価値は同時に両立できないとする「トレードオフ」の考え方から、複雑なものを複雑なまま、二つの価値のあいだの矛盾を受け止めるという「パラコンシステント」の考え方へ変えて多様性を生むという、未来のビジョンを示しました。

2 底流にある思い

中島 パラコンシステントの概念と京都哲学研究所^(註2)の設立は一連の出来事なのでですね。

澤田 そうですね。

日本をもう少し強くしたい。いまの日本は、世界の中で標準になれずビジネスで負けています。さらには、私が若かったところと違い、最近では留学に行く人さえ少ない。コロナにより社会はリモートヘシフトしましたが、政界、官界は変わらなかった。そういうなかなか変化することができない日本に対して、そして分断

(註1) 出口康夫教授は、京都大学大学院文学研究科長（対談当時：京都大学大学院文学研究科・副プロボスト、哲学専修教授／副研究科長）であり、京都哲学研究所の共同代表理事。また、出口教授が提唱する東洋的自己観である＜Self-as-We＞は、NTTが京都大学と行っている共同研究の基礎になった考え方である。

(註2) 正式名称は「一般社団法人 京都哲学研究所 (Kyoto Institute of Philosophy)」。

2023年設立、澤田会長と出口康夫教授が共同代表理事を務める。科学技術や経済の発展が必ずしも幸福や平和につながるわけではないことから、真の幸福とは何か、私たちが目指すべき価値観とは何かが問われている中で、産官学民の連携と学際的な研究を通じて多様な価値観を提唱し、多様な価値観が認められ共存し協調しあう「価値多層社会」の実現に向けた国際的なムーブメントを育むことを目指して設立された。

が進み利己主義が蔓延する世界に対して、経団連をはじめ私を含めた上の年代の人は危機感を持っています。どのようにすればこのような世界をより良い社会へと変えられるのか、それを突き詰めていくと、意識よりも深い価値観・人間観を変えていく必要がある、そのためには哲学が必要だと考えるに至りました。

中島 おっしゃるとおりだと思います。

澤田 日本には良いところがたくさんあります。京都学派も、西田幾多郎に始まり、第二次世界大戦との関係では賛否ある議論もありましたが、戦後は、そこはあまり触れずに、文化人類学のほうに向かいました。^(註3)それはそれで面白い。

中島 『パラコンシステント・ワールド』の中で今西錦司さん^(註4)についても触れていらっしやいましたね。

澤田 今西錦司、あるいは梅棹忠夫の『文明の生態史観』^(註5)にはすごく影響を受けました。川勝平太の『文明の海洋史観』^(註6)も、切れのあるすごく良い日本発の論理だった。そう

(註3) 京都学派は、京都帝国大学教授の西田幾多郎および田辺元を中心に、彼らに師事した哲学者たちが形成した哲学の学派のこと。西田幾多郎(1870年―1945年)は著書に『善の研究』などがある哲学者であり、西洋哲学と東洋哲学の融合を目指していた。京都学派は、西田の立場を基礎に、東洋でありながら西洋化した日本において単に西洋哲学を受け入れるだけではなくそれといかに内面で折り合うことができるかを模索したが、次第に「西洋は行き詰まり東洋こそが中心たるべき」という大東亜共栄圏の考えに近づくことになった。

(註4) 今西錦司(1902年―1992年)は生態学者・文化人類学者であり、京都大学名誉教授などを務めた。西田幾多郎などの思想に影響を受けながら生態研究を出発点とした独自の動物社会学や進化論を掲げた。その独自性は、個体ではなく「種」を単位にしていることにあり、種は認知とコミュニケーションなどにより同種個体の種社会を形成すると論じた。著書に『生物の世界』『主体性の進化論』などがある。

(註5) 梅棹忠夫(1920年―2010年)は今西錦司門下の一人である。生態学が出発点であったが動物社会学を経て民族学(文化人類学)、比較文明論に研究の中心を移した。代表作が『文明の生態史観』であり、梅棹はこの本で、アフガニスタン・インド・パキスタンの文化性や価値観、日本との差異を述べるとともに、西洋と東洋という枠組みによって世界を区分することを否定して第一地域と第二地域という区分で文明を説明している。

(註6) 川勝平太(1948年生まれ)は、早稲田大学政治経済学部教授などを経て、2009年から2024年4月まで静岡県知事を務めた人物である。著書に、近代はアジアの海から誕生したという説を論じる『文明の海洋史観』などがある。

いうものをきちんと広げていくことが大事です。経営の中においてもそういう芯があれば、日本ファーストだという意味ではなく、日本の価値観を明確に世界に発信しながら、世界の人とうまく議論をしたり建設的な方向感をつくったりできるのではないかと考えています。

Ⅱ 関係性の重要性

1 近代主体概念から〈Self-as-We〉の関係

澤田 京都大学との共同研究で〈Self-as-We〉を入れたのは大きかったと思います。この概念を入れたのは2020年から2021年ごろで、そこから2〜3年経ち、それを自然に話す人が、外国人を含め弊社のグループ内に出てきているので、この議論をもう少し続けていく必要があります。

しかし、〈Self-as-We〉の〈We〉を学問的な観点から同定したり、哲学的な形而上学上の理論を展開したりするということがまだ足りていないので、そういうことを研究所にはやってほしいと思っています。

中島 〈Self-as-We〉は非常に刺激的な概念ですね。しかも、根っこは京都学派の中にあるのだと思います。日本も、近代化の中で、19世紀的な自立した個人・主体という非常に強力な概念装置の前に立たされました。例えば夏目漱石なども一生懸命これを受容しようとしたが、うまくいかなかったわけですね。漱石の体調に非常に悪い影響を及ぼすほど、19世紀のヨーロッパの個人概念、主体概念は非常に独特なものだった気がします。これに対して、日本では、京都学派を中心として、主体ではなく関係性のほうが先ではないかといった議論をするようになったわけです。京都学派の、関係性のほうが主体に先立つという考え方はある程度哲学的

なインパクトがあったのではないかと思います。

出口康夫教授もおっしゃっていましたが、〈Self-as-We〉は、良い方向にも行きますが、悪い方向にも簡単に行ってしまう。〈Self-as-We〉の〈We〉が非常に閉じたものになってしまうと、大変よろしくない方向に流れかねません。

Self-as-We

NTTは、相反する概念や事象を包摂し多様な価値観を認め合うパラコンシステントな社会を実現していくことが持続可能な社会につながると考えています。そして、NTTは2021年に「Self-as-We」（われわれとしての自己）の考えに基づきサステナビリティ憲章を制定しました。そのほか、持続可能な社会を実現していくための様々な取り組みの基本にこの考え方を据えています。

「Self-as-We」はNTTと京都大学との共同研究において発表された概念で、チームなどで何らかの行為を共にする人々や、道具や環境などのあらゆる事物からなる系（「われわれ」）を一つの自己と捉え、その中の「わたし」はそのほかの人や物と同じく「われわれ」から行為の一部を委ねられている存在だとする考え方です。

そしてこれは、人・モノ・テクノロジーを含めたあらゆる存在とのつながりの中で支えられる自己観（Self-as-We）を基本に据えることで、自分だけではなく他の幸せも同時実現するという利他的共存社会を推進しようという新たな社会観の提案ともいえます。



澤田経団連副会長

澤田 正しい〈We〉か、悪い〈We〉か。性善説と性悪説の議論、ルソーとホッブズのよ（註7）うな状態になってしまいます。

中島 関係性が大事だといった場合、それは一体どういう関係性について論じているのかですね。それが現状すでにある関係性をただ肯定するものになってしまつてよいのだろうか。こういう疑問は、京都学派を中心に関係性のほうが主体に先立つという議論がされた当時から投げかけられていました。ただ、それに対して、あまりきちんと対応しなかったのではないかという気がします。それは戦後の宿題になっていったのだらうと思います

が、関係性をより良い方向へ持つていくためのプラットフォームをどうつくるかということが鍵になるのだと思います。

澤田 おっしゃるとおりだと思います。エシカルなり、日本で言う道徳なり、モラルティーなりというものを戦後はあまり突き詰めていないようにも思います。むしろ

（註7） いずれも社会契約説を代表する者であるが、ホッブズが性悪説的な前提の政府論である一方、ルソーは性善説的な前提の政府論であった。なお、ルトガー・ブレグマンは、従前のルソーとホッブズの二者択一論争のようなトレードオフ構造では捉えられないことを論じている。（Humankind: A Hopeful History Rutger Bregman, 2020）

ろ、日本においては、そこに蓋をしていくような流れがあり、さらに経済というワードが多く出てくるとグローバルイズムに至り、資本主義に独特の私有財産制の極致、つまり関係性よりも自己中心であることが良いことだというような方向へ全体として流れていったように思います。

結果、専制主義的な中国やロシアという国があり、それらとのデカップリングの環境にどう対処していくか、そこに対する答えはまだ見つかっていないのではないのでしょうか。

私が言うパラコンシステントは、山内得立が言うようなテトラレンマの四つ目の、〃Aであり、かつ非Aである〃というレンマです。その部分に注目したことはありますが、哲学的・学問的なサポートがないので、『パラコンシステント・ワールド』は直感的な肌感覚で書いている状態です。

2 文化や社会の見方を変容させる「スイッチ」を押していく

中島 いまロシアや中国という具体的な国のあり方、社会のあり方に言及されましたが、たとえそれが専制的な体制であったとしても、対話のチャンネルをどう持つかということは非常に大きな問題だと思います。おっしゃるように、善と悪の二項

対立で固定してしまい、あなた方は悪だから対応しないということになってしまおうと何も生まれません。それどころか、全体を見ると悪い方向に行ってしまう。どうやって対話のチャンスを見つめるかが問題です。

私は最近「スイッチ」という言葉をよく使います。どの社会にも、どの文化にも、いくつか埋め込まれた「スイッチ」があると思っています。それを押すことにより、その文化や社会の見方やさらにはあり方までもが変容していく。そういう「スイッチ」が織り込まれているのだと思います。どの文化も、単純・一様な構造をなしているわけではないのです。それぞれの文化は、襞ひだのように織り込まれ、入れ子状になった非常に複雑なあり方をしています。

澤田 まさに複雑化された関係性をおっしゃっているんですね。

中島 そうです。どこからどう見るかによってその当該文化は姿を変えて見えてくるわけです。私は中国が専門なので、現代中国の例えば民主主義に関する言説を少し追いかけてたりしています。もちろん、反体制派といわれる人たちの民主主義論も非常に面白いと思いますが、実は体制派の民主主義論もあります。中国政府が出している『中国の民主』という白書があり、それを読むと、中国は民主主義を一度も放棄していないと自分たちでは言っています。ただ、それは、われわれが考えるタイプの民主主義ではないのです。



中島研究主幹

この独自の民主主義の考え方は、京都学派の歴史の部門で昔、内藤湖南^(註8)、宮崎市定^(註9)という方々が非常に強ちに主張した唐宋変革論という、中国は唐と宋で社会のあり方がすっかり変わってしまったという議論に遠く由来しています。どうということかという、唐の時代までは皇帝と人民の間に貴族という中間団体がいましたが、

宋の時代になるとその中間団体がすっかり消えて皇帝と人民の体制になったというのです。そして、皇帝の元での平等は実是一種の民主主義でした。ただ、民主主義だけれども民主的なdespotism（専制）だったのです。

民主主義と専制主義は決して仲が悪いわけではなく、ある条件の下では結合してしまいます。こういう非常に皮肉な矛盾に満ちた状況を中国は宋以後、延々とやっている。私も『中国哲学史』^(註10)に少し書きましたが、前近代においてもいろいろな民主主義・人民主権の問題が中国でも議論されてきました。ところが、それが制度としてきちんと実現されず、

(註8) 内藤湖南（1866年－1934年）は戦前を代表する東洋学者である。唐宋変革時代区分論争などで学界を二分した。

(註9) 宮崎市定（1901年－1995年）は日本の東洋史学者である。著書に『論語の新研究』、『中国史』などがある。

(註10) 中島隆博『中国哲学史——諸子百家から朱子学、現代の新儒家まで』中公新書、2022年

ヨーロッパのような姿にならなかったのです。

私は、中国の文化の中にもいろいろな変革の「スイッチ」が埋め込まれていると思っています。それは、多くの学者が考えて残した、別の可能性です。ですから、それを押すことにより、中国の社会はこれからまた大きく変容していくのではないかと。そして、その変容に日本が、あるいは日本以外の国でもよいですが、力を貸していくことは十分ではないかと思っています。

澤田 それは素晴らしい概念だと思います。私は、経産省が設置している経済安全保障に関する産業・技術基盤強化のための有識者会議のメンバーになっていて、ここでは、経済安全保障戦略を固めてリスクマネジメントをしていくための意見を求められています。私としては、安全保障に影響を与えるような事態を招かないため、例えば、エネルギー・食料の自給率の向上、ルールベースの通商や情報流通、新技術開発、そして抑止力としての軍事パワーバランスなどのプロアクティブで抑止的な作戦、施策、対応を用意していくべきではないかという意見を言っています。

中島 そのとおりだと思います。

澤田 それがまさに「スイッチ」を押すことと等価だと思います。学問の世界を含めてですが、中国の政治思想体系の民主的な部分を日本の言論界から後押ししたり展開したりすることができれば、中国自身が自発的に、より民主化に向かい得ると思

います。いまは対峙する一方ですが、賛否あるかもしれませんが、そういうことが求められているようにも思います。

中島 対峙するだけだと力と力になってしまいますね。

澤田 現実論として、力の抑止力しか信じられない議論になります。

中島 それでは絶対に突破できないわけです。

澤田 かなりきついんです。突破できない。だから知恵というか、そういう思想というものを言語化するなり体現化する必要があります。申し訳ないですが、東京大学がもっとしっかりしなければいけないのかもしれないかもしれません（笑）。

中島 本当ですね。きちんとしろというご叱正と受け止めました（笑）。

Ⅲ 日本感性と人間観

1 日本発の概念を提起することの重要性

澤田 いろいろな分野で、例えばSDGsもそうですが、カーボンニュートラルからサークキュラーエコノミーに至る欧州の動きに思想的に対抗できる日本発の提言や提案がありません。むしろ日本がリードして、日本からそういう仕掛けや標準を打ち出していくことが必要であるように思います。

中島 それは、まさに我が意を得たりという思いです。いま私自身は、ヨーロッパの友人やアジアの友人と一緒に、人間の再定義が必要ではないかと考えています。19世紀的な啓蒙の光の中で理性を中心とした主体という人間像が生まれてきましたが、そういう人間像は人間中心主義だったわけです。それがノン・ヒューマン、つまり人間でないものに対して、どれだけひどい搾取をして抑圧してきたのか。その結果たどり着いた世界を、われわれはずっと生きているわけです。

人間がノン・ヒューマンに対して行ってきたことの結果は、もちろんノン・ヒューマンなものに対する搾取、例えば動物を虐待状況で飼育し殺害するとか、環境問題などもあります。しかし、この搾取の構造は人間の中にも当然折り返されてくるわけです。19世紀、20世紀の奴隷制などもそうですし、最近新しい奴隷制という言葉も使われていて、格差の中でひどい目に遭っている人間に焦点が当たって

います。こう考えてくると、人間中心主義的な人間像を、どこかで根本的に見直さないといけない。それを日本とかアジア発の概念で考えてみたかどうかと
思っている次第です。

人間中心主義 (Anthropocentrism)

人間中心主義とは、人間と人間以外の存在を比較して人間の特権性を主張し、人間の価値観が世界すべての尺度であり、自然環境など人間以外のものは人間が利用するために存在しているとする考え方です。この考え方によれば、人間性を高める＝人間以外の存在価値を低めることとなります。近代的な自然権的人権の考えが基礎となっており、人間とその主体性をなによりも重視する考え方といえます。

中島 私は大学で哲学を学んだ際、西洋哲学の先生に、哲学の最大の概念は「存在」だと言われ、それに大きな違和感を持ちました。それはたまたまインド・ヨーロッパ語族の言語枠組に縛られた概念にすぎないのではないか、と思ったからです。存在はもともと神に対し使われていた言葉です。それが人間にも使われ、Human Being、すなわち人間存在を探究することを延々とやってきました。その探究が行き着いた先が、20世紀のマルティン・ハイデガーの考えでした。彼はナチズムよりもナチス的な哲学者と言われています。そうすると、もはや存在の議論をハイデガーの延長で考えるわけには到底いかないだろうと思っているわけです。

澤田 ゲシュテル〈Gestell〉の議論です。

中島 ゲシュテル〈Gestell〉、つまり「総駆り立て体制」という技術の考えですね。

マルティン・ハイデガー

マルティン・ハイデガー（1889年－1976年）はドイツの哲学者です。ハイデガーとも表記されます。主著に『存在と時間』があります。

『存在と時間』は、古代ギリシャ哲学以来議論されてきていた「存在」概念について独自の哲学を展開した本です。ハイデガーは、「存在する」と「存在者（モノや動物や人間）」を異なるものと捉えた上で、「存在する」ことを考えられる「存在者」は人間だと考えました。しかも人間の間にもアリア人を特権化するヒエラルキーを置き、ナチズムよりもナチス的な反ユダヤ主義を展開しました。

ゲシュテル (Gestell)

ゲシュテル (Gestell) はハイデガーが提示した技術論で、日本語では「集一立」や「立て組」、「総駆り立て体制」などと訳されます。

ハイデガーは、技術の本質を、単なる道具性や手段性ではなく、「存在者」を特定の観点でのみ捉えることにあったと考えました。つまり、技術は、「存在者」に対して形を変えさせるなどして資源（石油、川をダムにしての発電、労働力など）を要求して引き渡させるとともに、人間に「存在者」を単なる資源としての利用可能性の観点でのみ捉えさせる危険なものだと論じました。

澤田 いま、技術と存在、技術と人間という観点を勉強しています。その過程にハイデガーがいるわけですが、ポストヒューマニズムからトランスヒューマニズム^(註12)へと流れた西洋のとてもない流れを戻してほしいという思いがあります。ポストヒューマニズムも悪くはないですが、西洋哲学をベースラインにして人間とは何かを考えていくと、LGBTQの議論とか、いま中島先生がおっしゃった奴隷制の議論にまづいてしまふ。なぜならキリスト教においては性的マインリティを厳しく罰する考え方があったり、人格も所有する道具として捉えたりするからです。そうではなく、東洋的に言うときとし生けるものというような、いわゆる自然学的、^(註13)あるいは現象学的^(註14)と言ふべき考え方をするのが理論的には良いのではないかという意見もあります。

私自身が、西洋文明だけではなく他の文明もあるではないかというレヴィ・ストロースの構造主義の考え方に^(註15)戻るべきではないかと考えています。いま、デヴィッド・グレーバー^(註16)の *The Dawn of Everything* ^(註17)を読んでいますが、中島先生が西洋哲学だけではないとおっしゃったような、そういった観点をに入れて考えてみると、人

(註11) ポストヒューマニズムとは、人間と人工知能などのテクノロジーとが融合して人類の肉体や限界を超えた能力を持つような「人間を超えた存在」になることを志向する思想である。

(註12) トランスヒューマニズムとは、新しい科学技術を用いて人間の身体と認知能力を進化させ、人間の状況を現在の状況から大幅に拡張された能力を持つ存在へと前例のない形で向上させようという思想である。日本語では「超人間主義」などと訳される。

(註13) 自然学とはアリストテレスから始まる自然を研究対象とする哲学であり、自然すなわちありとあらゆる物事の本性を体系的・理論的に考察しようとする哲学である。

(註14) 現象学とは現象がどのようにして成り立っているのかを研究対象とする哲学である。

(註15) クロード・レヴィ・ストロース(1908年―2009年)は、フランスの社会人類学者、民族学者である。1960年代に、人間は自由であるが故に自らの行動を主体的に決定しないといけないと考える実存主義(サルトルが主に主張した)を批判し、絶対的な主体性を疑問視する構造主義を台頭させた。レヴィ・ストロースの構造主義は、個人の思考は社会における目に見えない普遍的な何か(=構造)によって形成され、無意識に支配されているという考え方である。

(註16) デヴィッド・ロルフ・グレーバー(1961年―2020年)はアメリカの人類学者である。著書に『価値論』『負債論』などがある。

(註17) 邦題は『万物の黎明 人類史を根本からくつがえす』(酒井隆史訳、光文社、2023年)。デヴィッド・ウェングロウとの共著である。この本ではこれまでの西洋中心主義的な文明観が批判的に論じられている。

問とは何かという問いの視点が変わってきます。それをぜひ日本発で行いたい。西洋哲学を否定することはないので、両立させるようにして行いたいです。

中島 私がいま考えているのは〈Human Co-becoming〉という考え方です。〈Being〉ではなく〈Co-becoming〉です。

〈Human Co-becoming〉

（中島隆博「はじめにー人の資本主義」、中島隆博編『人の資本主義』、東京大学出版会、2021年、v-vi頁より引用）

わたしたちは近代になって、すいぶん人間中心主義的な人間観に浸ってきました。それは神の代わりなのです。人間以外の動物や生物そして環境が、人間にどれだけ苛まれてきたかを考えるだけでも、人間中心主義の残酷さはよくわかります。そして、それが人間の中に折り返されて、人間を深く分断していることもよく知られるようになりました。

— 中略 —

それに対して、わたしたちが考えているのは、Human Co-becoming といいいます。とりわけ西洋哲学の文脈では、人間は Human Being として、存在の側から、つまりは存在としての神の側からみられてきました。それに対して、近年、東洋哲学を研究する人々から、Human Becoming という考えが出されています。これは「仁」という古い概念の読み直しでもあり、人間は人間的になっていくものだ、という意味です。わたしたちはそれに Co to ならず、「一緒」という言葉を付け加えて、Human Co-becoming と言ってみたい

と思っています。つまり、人間はひとりで人間的になることはできず、他者と共にあることではじめて人間的になるといことです。

これが、西洋哲学の根本概念である存在論への挑戦であることは容易にわかるかと思いますが、存在に代えて変容を、しかもともに変容することを、人間の再定義として考えてみたいのです。ひとりひとりの人間が根底的に変容することに、人間のチャンスがあると思います。そしてそれが、人間の価値ではないでしょうか。

澤田 なっていくということですね。

中島 人間になっていくというプロセス、つまり^{註18}で指し示されるプロセスが大事だと思います。人間は最初から人間的であるわけではなく、しかもひとりで人間的になることはできない。

澤田 人間は関係性、interdependency（相互依存）の動物です。京都哲学研究所創設記念シンポジウムでグラハム・ブリースト教授が^{註18}言っていたと思います。

中島 根元的に社会性が染み込んでいる、そういった動物だと思います。

2 日本風の感性、情動を共通概念にしていく

澤田 弊社の研究者に触覚を研究している人がいて、「何で触覚なの？」と聞いたら「五感で最初は触覚ですよ」という答えが返ってきて、びっくりしまし

(註18) グラハム・ブリーストは、ニューヨーク市立大学大学院センター特別教授、メルボルン大学名誉教授を務める論理学者・哲学者である。2024年1月に行われた京都哲学研究所創設記念シンポジウムにおいて基調講演を行った。

た。生物学的な感（sensing）の世界から、情動（emotion）の世界、さらに意識（consciousness）の世界がありますが、その情動の議論をもっと解明したいという個人的関心があります。

中島 アジアの哲学には基本的に情動の問題をかなり深掘りしてきた歴史があります。例えば、私は、〈Human Co-becoming〉は「仁」とか「礼」という中国の古い概念の現代語訳だと主張しています。日本語で言うところの「共生」です。

澤田 仁・義・礼・智・信の仁ですか。仁は難しいですね。

中島 ええ。仁は、「イ」（にんべん）に「二」と書きます。和辻哲郎などは、人間を考える際に重要なのは「じんかん」、つまり人の間の関係だと言いましたが、一人で完結していない何らかの社会的なあり方が仁です。

仁を問う（『論語』顔淵篇）

顔淵 仁を問ふ。子曰く、己に克ちて禮を復むを仁と爲す。一日己に克ちて禮を復めば、天下仁を歸す。仁を爲す己に由りて、人に由らんと。顔淵曰く、其の目を請ひ問ふと。子曰く、非禮視ること勿れ、非禮聴くこと勿れ、非禮言ふこと勿れ、非禮動くこと勿れと。顔淵曰く、回不敏なりとも雖も、請ふ所の語を事とせんと。

【通釈】

顔淵が仁とはどういふことかと質問した。孔子は、「己に克ち礼を復むを仁と爲す」とい

（註19）「仁」「義」「礼」「智」「信」は儒教で説く五つの徳目であり、合わせて五常または五徳という。儒教は古代から伝わる神話や制度や当時の習俗などの集合体であるが、孔子が登場してその姿を大きく変えた。

（註20）和辻哲郎（1889年－1960年）は日本の哲学者・倫理学者・文化史家・日本思想史家である。日本の思想と西洋哲学の融合を目指した哲学者だと評価されている。著作に『古寺巡礼』、『人間の学としての倫理学』、『風土』などがある。

う、当時世間によく言われていた古語を用いて答えた。すなわち「克己復礼が仁だよー自分の身勝手を行わないように、心では自分というものを引きしめ、外部は先王の定めた社会の規則、人の踏まねばならぬものを踐み行なうことが仁である。もし、人がただ一日だけでも、この克己復礼で仁を行なうことが出来たら、その影響は広く行きわたって、天下の人々が皆仁徳に帰服するようになるであらう。この己の身勝手に打ち勝って自分が礼を實踐しうるようにすることは、結局、自分の力によって出来ることであって、他人の力に俟って出来るものではない。すべて、人の身に負わった心の動きによるもので、いわゆる、我、仁を欲すれば、ここに仁が行なえるのであると。そこで顔淵がさらに進んで、「これを実行するための細目をお教え下さい」と言った。これに対して孔子は、「礼にかなわぬことをジツト視ていてはならぬ。礼にかなわぬことに耳を傾けてはならぬ。礼にかなわぬことを言ってはならぬ。礼にかなわぬことを行動にあらわしてはならぬ。すべて人の視聽言動を礼に合致さすようにせよ。礼は人の世に秩序を与え、社会の平和になる法則であって、すべて道理にかなったものを、古来の聖人たちが善く考え善く行なって、身を以てこの世に残し示したものであるから、これに従って視聽言動を慎めば、そのまま仁の徳と一致するのである」と教えた。顔淵が感激して、「回（編注：顔淵のこと）は愚かでふつつか者ですが、何とかして、このお言葉を、私の一生の仕事にしたいと存じます」と申し上げた。

（吉田賢抗『新釈漢文体系 第一巻 論語』明治書院、昭和35年、二五三―二五四頁より引用）

余説では、「克己復礼の余事は極めて有名である。己という私心にうち克ち、外は礼に従った行動をすることが仁である。克己によって調伏した自己が、復礼によって大きく社会性を帯びて積極へ転ずるのである。」（同、二五四頁）、「客観的規範の礼が、主観的な仁という徳性に転じたことを知ることのできる大切な一章として十分味わうべきである。」（同、二五五頁）と解説されている。

中島『論語』などを讀むと、仁と礼は裏表の関係になっています。例えば顔淵篇に「克己復礼が仁である」とあります。^(註21)では、礼とは何でしょうか。礼は規範です。どんなタイプの規範でしょうか。それは法とは違います。それは身体に根差して、感情を陶冶するような規範です。ある種の美しさとか、かっこよさに当たるものです。われわれは普段、そんなものが規範に入るか否かという議論をしていませんが、礼はそこを議論しています。澤田会長は情動とおっしゃいましたが、例えば泣くべきときにきちんと泣く、悲しむべきときにきちんと悲しむ、喜ぶべきときにきちんと喜ぶことは案外難しいわけですよ。

澤田 意識が入ってしまいます。

中島 しかし、それがきちんとできることが人間的であるというのは、中国哲学がもたらした遺産だと思います。

澤田 今西錦司が身体論^(註22)を言うのは、結局そこから来ているということです。中島 そうだと思います。そして、日本は身体と感情の問題をさらに根元的につきりもつとラディカル(radical 根っこから)に展開しました。仏教を例にしてみます。仏教には、仏性、つまり人間には仏になる本性(可能性)が備わっているのではないかという考え方があります。「悉有^{しつうふつしやう}仏性」と言いますが、日本に仏教が入って来る前の解釈は、人間だけに仏性が備わっているというものです。ところが、日本に

(註21) 前掲『論語』顔淵篇を参照。

(註22) 今西錦司については前掲註4を参照。今西の身体論は著書『生物の世界』における、「身体即生命、生命即ち身体という具体的な生きた生物なのである」や、「生命と身体を別々に見る考え方は、時間と空間等を別々なものと考えるのに等しいであろう」などの記載にその考えが現れている。

(註23) 道元(1200年-1253年)は鎌倉時代初期の禅僧で、曹洞宗を展開し、日本語の限界において思考した。その著作が『正法眼蔵』である。

仏教が入って来ると、悉有仏性の解釈は、生きとし生けるものすべてに仏になる本性（可能性）が備わっているという考え方にまで拡大されました。

澤田 そうですね。全部包含してしまう。

中島 動物だけではなく、場合によっては植物も生きとし生けるものなのです。

澤田 石も生けます。

中島 こういう根元的な展開をします。

澤田 建物も生けます。人工物でも。魂が入るようになっていく。

中島 おっしゃるとおりで、道元は、そうした人工物を牆壁瓦礫（註24）と呼びました。そこにも仏性の議論は延びていく。このように日本的な想像力にはすさまじいものがある

と思っています。それを生かさない手はないだろうと考えています。

澤田 もったいなく思うことがあります。例えばITの世界でユビキタスとよく

言いますが、これはラテン語で「どこにでもある」という意味ですが、あらゆるところに神が宿するという意味で、日本風な表現です。せっかくそういう言葉が使われているのに、実はそこに日本的な仏性やそれを変化させた日本の感性、情動性があるというような議論展開を誰もしてくれていません。

日本の概念は、多様性を認めながら包摂性も出す、かなり自然的な、アニミズム（註26）に近いような概念でもあるように思います。一神教を信仰する方々に説明するには、

（註24）牆壁瓦礫とは文字通り塀や壁、瓦、小石などを意味するが、道元が執筆した『正法眼蔵』において、仏心とは牆壁瓦礫であるとの記載がある。

（註25）ラテン語の「ubique」（どこにでもある）に由来する英語（ubiquitous）で、いつでもどこでも存在するという遍在を表す言葉。ここから転じて、ICチップ等を含むコンピューターが身の回りのあらゆる場所に存在し、相互連携する情報環境のことを指す。1980年代後半に提唱され、2000年代前半に多く用いられた。2010年代後半によく用いられるようになった言葉、IoT（Internet of Things（モノのインターネット））と似た概念。

（註26）アニミズムとは、エドワード・バーネット・タイラー（1832年－1917年）がプリミティブな宗教の中心概念として主張したもので、すべてのものの中に靈魂または靈が宿しているとする考え方であるが、一神教をゴールとする近代的なヒエラルキーを宗教に持ち込むこととなった。

共通言語がつかれない、つくりにくい。中国から来たベースを基本に、自分たちの感性・情感性を足しているのが、中国に対しても説明することが難しい。自分の中で関心対象になっているのは、情動という部分で共通概念を持てないだろうかということです。

ITがいまSNSで分断社会をどんどんつくっていますが、それにはまたやり切れない思いを持っています。その部分の中島先生がおっしゃったような〈Cy becoming〉、出口康夫先生が言うような〈Self-as-We〉という概念で、より良いものにしていきたいと思っています。

3 環境世界をまたぐ技術の研究、そのとき「人間とは何か」が問われる

澤田 実は私のベースはユクスキュルです。モナドの議論は実は全く勉強していません。ユクスキュルは時代的にもライブニッツの影響を受けていると思います。

ヤーコプ・フォン・ユクスキュル

ヤーコプ・ヨハン・バロン・フォン・ユクスキュル（1864年―1944年）は、

エストニア出身のドイツの生物学者・哲学者です。著書に『生物から見た世界』があります。ユクスキユルの思想は、36頁で説明する「環世界」に現れています。

ゴットフリート・ライブニッツ

ゴットフリート・ウィルヘルム・ライブニッツ（1646年ー1716年）は、ドイツの哲学者・数学者です。中国哲学に大きな影響を受け、主著に、『モナドロジー』、『形而上学叙説』、『弁神論』などがあります。次に説明する「モナド」概念を提唱しました。

モナド (Monad)

ライブニッツが提唱した、空間を説明するための概念です。ライブニッツは、現実が存在するものの構成要素を分析していくと、それ以上分割できない広がりや形を持たない実体に到達すると考え、その状態のことを「モナド」と呼びました。ライブニッツによれば、どのモナドも他のすべてのモナドと互いに必ず異なっており、かつ、変化し得るものであるが、その変化は他のモナドによる影響ではなく、神が創造の時点で予定した変化（予定調和）であると論じています。すなわち、世界のあらゆる出来事はあらかじめ神のもとで決定されていて、世界のあらゆる個体はそれを個体自身にプログラミングされているという考え方といえます。

中島 ユクスキュルとライブニッツをいま一番見事にまとめ上げたのが、ジル・ドゥルーズというフランスの哲学者です。彼の発想は、ライブニッツの考えから神(註27)を外したらどうなるのか、というものでした。ライブニッツは最終的に神に依拠しています。ところがライブニッツが面白いのは、二十歳のときから、イエズス会の宣教師たちがヨーロッパにどんどん入れていった中国情報をずっと読み続けていたことです。彼が最後に出した本は『中国自然神学論』で、それを書いて亡くなります。私の習った坂部恵先生という哲学の先生（『理性の不安——カント哲学の生成と構造』や『ヨーロッパ精神史入門——カロリング・ルネサンスの残光』が著作としてあります。）は、カントは百年に一度の天才、ライブニッツは千年に一度の天才だ、とおっしゃっていました。私はその意味についてずっと考えてきました。ライブニッツにあつてカントにないもの。それは神の創造より以前に歴史のある中国という他者ではなかったのか。ライブニッツにとって中国は非常に大きいものがありました。神がこの世界を創造したという聖書の記述よりも古い歴史が中国にあるとすると、一体、神がこの世界を創造したというキリスト教的な言説はどうなるのかと真剣に考えたのです。ひょっとしたら、この世界は単一ではないかもしれない。根本的な複数性を考えなければいけないのではないか。そこにまで至ったのだと思います。

（註27）ジル・ドゥルーズ（1925年－1995年）はフランスの哲学者である。ジャック・デリダなどとともにポスト構造主義の代表的哲学者と位置付けられる。主著に『差異と反復』、『千のプラトー』などがある。

澤田 構造主義もそういう議論に昇華できると思います。

中島 そうだと思います。

澤田 ドウルーズは全部読んでいませんが抄訳を見たことがあり、言いは悪いですが、カリフォルニアの左翼的思想に行っちゃってしまっているような気がします。

中島 アメリカのものをフランスの哲学者が読むことはあまりありません。私の知っている限りは、ドウルーズよりも一つ上の世代にジャン・ヴァール^(註28)がいて、日本からフランスに行った森有正^(註29)を庇護した人です。

ジャック・デリダ^(註30)、エマニュエル・レヴィナス^(註31)、ドウルーズの世代の先生でした。彼がアメリカのものをフランスに入れました。ドウルーズもそれに影響を受けていて、フランスの思索を外に向かって開いていきます。そういう努力をしていき、それによりヨーロッパの哲学を完全に読み直してこういう努力をした人です。

澤田 さすがフランスですね。

中島 ユクスキュルは例えばダニの話などが出てくるわけですよ。ダニが生きているウンベルト (Umwelt) というものがある。

澤田 環世界ですね。

(註28) ジャン・アンドレ・ヴァールは(1888年－1974年)はフランスの哲学者である。英米多元論やドイツ哲学思想などの他国の哲学思想をフランスに紹介した。著書に『実存主義的人間』などがある。

(註29) 森有正(1911年－1976年)は、デカルトやパスカルなどのフランス17世紀哲学を中心に研究した日本の哲学者で、フランス文学者でもある。1950年に東京大学助教授在職中にフランスへ留学したが、東京大学を辞職してそのままパリに定住し、東洋言語文化学院で教鞭をとった。著書に『デカルトとパスカル』、『経験と思想』、『遥かなノートル・ダム』がある。

(註30) ジャック・デリダ(1930年－2004年)はフランスの哲学者である。ジル・ドウルーズとともにポスト構造主義の代表的哲学者と位置付けられる。ハイデガーの思想などを批判的に研究した。著書に『声と現象』などがある。

(註31) エマニュエル・レヴィナス(1906年－1995年)はフランスの哲学者である。現代哲学における「他者論」の代表的人物だとされる。ハイデガーを根底的に批判する、他者論を展開した。著書に『時間と他者』、『全体性と無限』、『存在するとは別の仕方であるいは存在することの彼方へ』などがある。

環世界 (Unwelt (ウンベルト))

すべての生物はそれぞれ種特有の知覚世界を持って生きており、各生物にはそれぞれが知覚し作用して主体的に構築した独自の時間・空間としての世界があるという事態を「環世界」といいます。

ユクスキュルは、環世界は主体が知覚する知覚世界と主体が身体的に作用する作用世界の二つによってつくり上げられていると論じました。また、ユクスキュルは、個々の環世界は主観的に構築されているものであるため、主体から独立した環世界はあり得ず、かつ、個々の環世界はシャボン玉のように薄い膜に覆われ、互いに接してはいるが摩擦はしないと考えました。

中島 環世界は、例えば人間なら、人間が認識するというのはどういうことなのか、これが問われているわけですね。ダニがダニとしてある世界をダニがどう認識しているかを人間が分かることはしないわけですね。

澤田 それはダニにならないとわからない。

中島 根本的な、非共可能性と言いますが、Compossibility (共可能性)ではなく Impossibility (非共可能性) が人間とダニの二つの世界にはあるわけです。では手掛かりが全くないのかというと、実はそんなことはないわけです。そこが現代哲学の面白いところで、ダニになればよいじゃないか、ダニに becoming していくことがあってもかまわないじゃないか、と言います。われわれは、ダニになること

(註32)『莊子』に記載されている説話のひとつで、「胡蝶の夢」という言葉の語源となっている。莊周（莊子）が夢の中で蝶になって飛んでいたが、目が覚めて、果たして自分は蝶になっていたのか、あるいは夢の中での蝶が本当の自分で、人間の夢を見ているだけなのかと考える話である。

共可能性 (compossibility)・非共可能性 (incompossibility)

共可能性とは複数のものが共同で存在しうる可能性を意味します。ライプニッツが用いた概念です。

例えば、(Aは同一個体であることを前提として) 同日時に川を渡るAと川を渡らないAは共可能的ではありませんし、同日時にXにいるAとYにいるAは共可能的ではありません。しかし、これらのAたちは別々の世界に分けて存在することは可能です。ひとつの世界は共可能的なものの集合であり、非共可能的なものが同じ世界に属することはありません。また、ある世界とある世界の関係は非共可能的です。この共可能性と非共可能性は、神が世界のあらゆる出来事をあらかじめ決定する際のルールでもあります。ライプニッツは、世界をこのように考えました。

はなかなか考えませんよね。しかし、古代中国の想像力を持つてすれば考えることはできます。例えば『莊子』の中で蝶になるといふのがありますよね。^(註32)

澤田 ダニは哺乳類が発する酪酸とオリゴを嗅ぎ取って吸血対象を感知しており、イルカの場合は脳がかなり発達していることに加えて、メロン体という超音波を発したり集めたりする器官を使って音波で周囲のものを感知します。そのような人間以外の環世界を取り入れて、より自然に近い状態の実現を目指すことはできないかとNTTでは研究しており、そのような方式を取り入れたサウンドゾーン(音響環境)^(註33)を開発するなど、多様な環世界の情報を活用し、新たな価値を創造することも

(註33) NTTが開発を進めている「パーソナライズサウンドゾーン (PSZ)」は、「聴きたい音だけが聴ける世界、聴かせたい音だけが聴かせられる」を可能とする究極の音空間であり、場所を選ばずに仕事やエンタテインメント体験が享受できる新たなライフスタイル、実空間・バーチャル音空間融合による新たな音響体験、リビング並みに静かで離れた席どうしで快適に対話ができる自動運転カー、聴力の能力拡張による生活の質の向上などの実現を目指している。

研究対象になっています。

中島 めちゃくちゃ面白いですね。

澤田 最終的には、中島先生がおっしゃった、哲学的にダニになれるということを技術を用いて疑似的にダニになることを実現する。それは量子生物学までいきますが、人間がなぜ生きているかということがまだクリアに分かっていませんので、その部分を工学的に追求したい。しかし、そのときには、中島先生が先ほどおっしゃった、人間とは何かという問いに関する議論が進んでいないと、われわれが進めていくバイオデジタルツインなり量子生物学の領域が進むにつれて、社会的、精神的に揺らぎを来してしまうと思います。そのためにも哲学の研究を進めていただく必要があるというのが、いまの私たちの認識です。それが京都哲学研究所へとつながっていく議論です。

疑似的に人間ではないものになる技術と、そのとき直面する課題

バイオデジタルツインとは、病院で用いられるカルテは無論のこと、各種の受診データや、個人が日常生活を通じて得られる各種の身体データをデジタルデータとしてコンピュータ内に取り込み、デジタルツインコンピュータリング技術によってサイバー空間上に緻密な写像を実現するものです。多種多様で膨大なデータを収集し、生体機能のモデリングを行い、AI（人工知能）を活用した高度な生体情報処理を行うことで、個人の特徴を捉えたりスク

予想・要因分析、診断や治療方針を出力として得ることができます。もしこのようなバイオデジタルツイン技術を利用することが可能になれば、次なるパンデミックが人類に襲い掛かったとしても、速やかに対処法を見出すことも実現できるようになります。データ蓄積が進めば、早い段階から重症化しやすい方、軽症で済む方を判定でき、医療現場のひっ迫を緩和することもできるようになります。また、この薬は効きやすい、この薬は効きにくいというような各個人への適用可否や効能を事前に理解することができれば、治療を効率良く行うことも可能となります。

しかし、バイオデジタルツインを実現するためには課題もあります。まず、多種多様で膨大なデータをいかに集めるかということが重要な課題です。身体データは大きく分けて2種類に分類されます。一つは、Personal Health Record (PHR) で、スマートウォッチに代表されるように、身に着けて運動量を計測する機器により日常的に得られる歩数・走行距離・深部体温等が該当します。ただし、日常的に得られるといってもすべての生体データが得られるわけではありません。これまで十分に計測できていなかった身体データを収集できるかがバイオデジタルツインを実現する上で重要な鍵となります。もう一つは、Electronic Health Record (EHR) で、病院での診察や人間ドックで検査したデータの蓄積など主に医療機関および薬局で取り扱われるデータや、ゲノム（生物の持つ遺伝子情報）解析データが該当します。

このような非常に繊細な個人情報や、これまで可視化されてこなかった生体情報や未来のリスク情報を活用する際には、悪用されないように一定のルールが必要です。生まれてくる前に子どもの将来の病気やリスクが分かった際に、命の選択をするという議論も出てくると思います。

IV 日本発の知の普遍化

1 ボトムアップで土着的な知の普遍化を

中島『パラコンシステント・ワールド』の中でも自己変革という言葉が何回か出てきたと思いますが、人間は変容していくものであり、しかも、その変容は、単に自分一人が変容するのではなく、まさに自分の環世界そのものも変容する。そこが面白く、かつ、ポイントだと思います。

澤田 いま日本は受け身が多いです。環世界が変化しているのを後ろから追いかけているような。先ほど言ったように、世界、特に欧州における環境に関する動きなどに対してもバズワードは全部外から入ってきて、それを受けるだけになってしまっています。むしろ、日本から世界を変えていくんだという自己変革をしていくためには思想が必要です。

中島『パラコンシステント・ワールド』の中でも「ローカルなもの」を何度も強調されていたと思いますが、われわれが文化人類学の人たちとしゃべっていると「indigenousな」という言葉をお使いになります。土着的な、在来的なという言葉です。indigenousな知というものを普遍化していくことがいま本当に大事だと強調されています。今までの普遍は逆でしたよね。トップダウンで下りてきた。

澤田 トップダウンです。キリスト教もそうです。グローバリズムだった。

中島 そういうトップダウンで下りてきても、それは人の心を全く打たないし、偽物だという議論をしています。そうではなくボトムアップ型の普遍化(universalizing)がいま求められているのです。その中にindigenousな知が入っていないといけない。それが入っていくと、例えばテクノロジーに対する新しい考え方といったものも、もう一度出てくるのではないでしょうか。

澤田 出てくると思います。経営で言うところ、8割ローカル、2割共通化というような。最初にお話しした公共性と企業性もそうですが、そのそれぞれでパフォーマンスを最大化するようなものです。しかし、結果的に見れば投入量としてはバランスが出てきます。ローカルとグローバルは決して交わっていませんが、ローカルとグローバルのハイブリッド化がたぶん求められています。ところが、今までは企業経営はトレッドオフで動いてきているので、0か1かで判断してきました。しかし、現実にはアナログであるということだと思います。

先ほど先生が「スイッチ」とおっしゃいましたが、自ら自己変革のスイッチを押すような、そういう言論空間を21世紀政策研究所では是非うまくつくってほしいですね。こうやって議論がいろいろ起こっていく。それもグローバルに起こっていく。そういうことが求められています。京都哲学研究所が開催する会議でも、グローバルにそのような議論を継続的に実施し、モメンタムをつくる仕組みをつくる

うとしています。

2 日本から人文学や社会科学とのエンゲージメントを発信する

中島 いま21世紀政策研究所でいくつかの企業の方々といろいろ対話させていたのですが、それぞれの企業にある「スイッチ」を探す作業を共同でやっている感じです。それぞれの会社の中にはいろいろな歴史があります。その一つに言説の歴史があります。つまり、その会社がどのような言葉を大事にしてきて、それを変えていったのか。このことはどの会社にも刻み込まれていると思います。

財務諸表的な華やかさを出すことも結構ですが、本当に会社の価値を示すのは言葉だと思っています。その言葉を一緒に掘り当てていく。そして、それを精錬して磨いていく。これがないとindigenousな知を普遍化することは難しいです。

澤田 おっしゃるとおりです。継続的に改善をすると言いますか、良いものに環境を変化させなければいけません。経団連の十倉雅和会長も苦言を呈されていたように、日本の製造業がデータを書き換えたりしたという問題が表出しました。この原因を突き詰めていくと、上に言えなかったとか、空気を読むとか、いわゆる言語化されていない部分があり、こういった部分を直してはならないのだというような

暗黙の了解のようながあります。継続的に改善をするために残すものと直すものを、言語化できているとよいのですが、言語化してもまた年月の経過で古くなるものがあります。それを、どう断捨離^(註34)するか、どう守破離^(註35)するか。ケース・バイ・ケースですが、そこがクリアではないような気がします。

欧米的な方法で、コーポレートガバナンスのように、マネジメントに一定の標準化を導入することによって社会を変えていくことは可能です。他方で、標準化以外の方法で社会を変えていくためには、マルチステークホルダー論があると思います。日本的な良さ、例えば、伝統と創造をどう両立させるかなのでしよう。

中島 その点で、例えばコンプライアンス的のいろいろなコンサルが入るわけですが、私はそれでは足りないと思っています。それでは形だけ整えることでだいたい終わってしまい、本当のありように迫っていない感じがします。澤田会長に何度も触れていただきましたが、人文学や社会科学といった、いわゆる文系学問の出番ではないかと思っています。

澤田 おっしゃるとおりです。特に Humanities（人文学）ですね。

中島 はい。特に Humanities はそこに入っていないかといけなくて、いまこそ日本の企業の良い伝統とうまくつながっていくことが大事ではないかと思っています。そういうしないと、指をくわえていてもいまの資本主義は変わらない。それが良い方向に

(註34) 断捨離とは、必要のないものを断ち、捨てて、執着することから離れるという意味である。

(註35) 守破離とは、まずは指導者の教えを真似、続いて教えを破り、最後は独自の道に進むという意味である。

向かっていればよいのですが、社会的な格差を激しく生み出したり、地球温暖化を引き起こしたり、よろしくない側面が噴出しています。ですので、資本主義を捨て去るのではなく、資本主義を鍛え直さなければいけません。そのためには Humanities と日本企業の果たすべき役割はきわめて大きいのではないのでしょうか。

澤田 日本の経営者が感じていたり持っていたりする素養は、言語化することではできていませんが、欧米の経営者から見ると、実はめちゃくちゃ新しい視点でもあります。

ハーヴァード大学、スミス大学、^(註36) ニューヨーク市立大学、タリン大学、近い時期にマルクス・ガブリエル教授にも会いますが、私がそういう哲学の人のところへ行き、インフラの議論をしたりして哲学の関係を言うと、そこでまずびっくりされます。すごく刺激を受ける、学際を超えていると言われます。

なかには心配する人もいて、^(註37) Academy integrity (学問の独立性) とか Academy integrity を保ちたいということも如実に言われますが、それは少し後にしてくれ、別にいまこれを商品にしようと動いているわけではないという回答をします。ともかく、いま日本企業にとっては結構チャンスのような気がします。

日立製作所の東原敏昭会長も同じような概念と意見を持っておられ、京都大学とは長く研究をされています。これからそういうものを展開すること、いろいろな

(註36) ボン大学教授、京都哲学研究所シニア・グローバル・アドバイザー。

(註37) 「Academy integrity」(学問的誠実さ)とは、研究や執筆などの学術活動における誠実さ、信頼性、公正さ、知的財産の尊重などの倫理的な行動を求める価値概念をいう。

方々が啓発され、中島先生がおっしゃる「スイッチ」を自分で押していく。これは、日本、また社会、世界にとって良いことではないでしょうか。人文系の学問の日本発エンゲージメントが重要です。

3 日本思想の最大の特徴は「全然異なるものを複合させる」こと

中島 おっしゃるとおり、まさにエンゲージメント(関与)がいま求められています。私の友人でトマス・カスリスというオハイオ州立大学の日本哲学史の名誉教授がいます。『日本哲学小史 Engaging Japanese Philosophy: A Short History』という700頁を超える本の著者です。彼は engaged knowledge と detached knowledge、つまり、関与して見ている知識と距離をとって見ている知識とは全然違うと言っています。土を例に挙げると、陶芸家が知っている土の知識と地質学者が知っている土の知識は全然違うということです。本当は両方必要なわけです。

澤田 おっしゃるとおりです。人により見えているものが全然違う。

中島 両方を知ることが日本はずっとやってきたじゃないかと、カスリスさんは言うわけです。

澤田 そのはずですよ。

中島 彼は空海^(註38)の専門家ですが、空海を一言で言うのと、空海はすべてを知りたかった人です。すべてというのは何かというと、いま申し上げた engaged knowledge v detached knowledge の両方です。仏教では密教と顕教という言い方をよくしますし、顕密体制などとも言います。^(註39)表に現れている知と密にかくまわれている知の両方が必要で、日本は顕密体制でずっとやってきたわけです。その面白さは他の社会にはありません。例えば神仏習合^(註40)などは極めて奇妙奇天烈で、こんな恐ろしいことは誰も想像できなかったのですが、日本はやりました。澤田会長がおっしゃるパラコンシセント・ワールドが、神仏習合という形で、既に日本にはあったのです。

澤田 神のほうも、伊勢神宮へ行くと荒魂と和魂^(註41)で分かれています。二つでセットのような。そこも習合しているのですよね。

中島 伊勢の外宮・内宮^(註42)の関係は不思議といえば不思議ですよね。異なるものが共存しているのです。例えば空海も両界曼荼羅^(註43)と言っていますよね。金剛界曼荼羅と胎藏曼荼羅は、もともと全然関係なかったらしいです。何の関係もない二つの世界を、空海は一つにして両界と言ってみた。空海という人、あるいは空海に触発された日本の思想の最大の特徴

(註38) 空海は、平安時代初期の僧で、真言宗の開祖である。諡号^{しごう}（死後に贈られる名前）は弘法大師^{こうぼうだいし}という。

(註39) 「密教」^{みつぎょう}とは秘密の教えという意味であり、宇宙の真理そのものである大日如來の教えを修行を積んで取得する仏教のことをいう。ちなみに、東大寺（奈良県）の大仏は大日如來である。これに対し、「顕教」^{けんぎょう}とは公然と明らかにされている教えという意味であり、人間の言葉で分かりやすく教えが説き明かされている仏教のことをいう。身近なものとしてお経がある。「顕密」と言う場合には仏教そのものを指す。「顕密体制」と言う場合には歴史学者である黒田俊雄（1926年－1993年）が提唱した、密教を基軸に統合された顕密仏教が中世日本で正当とされていた宗教であるという考え方を指すことが多い。

(註40) 「神仏習合」とは、日本に伝来した信仰である仏教が、社会に浸透する過程で日本の土着信仰である神道（「神」観念）と融合して、ひとつの信仰体系として再構成された現象をいう。神仏混淆ともいう。

(註41) 神には「荒魂」^{あらみたま}と「和魂」^{にやみたま}という二面性があるといわれている。荒魂とは天変地異とも捉えられるような神の荒々しい側面のこと、和魂とは恵みと呼ばれるような平和的で優しい側面のことを指す。伊勢神宮では荒魂と和魂が分けて祀られており、天照大御神は、その和魂が正宮である皇大神宮に、その荒魂が別宮である荒祭宮にそれぞれ祀られている。

は、全然異なるものをつなげてしまふ、compound（複合語）の思想です。全然違うものが複合されると、全く新しい地平が開かれます。この努力を日本の哲学は延々とやってきたのです。

澤田 そこを西洋哲学とリンクさせる共通言語体系をつくらなければいけないかもしれません。

中島 そうだと思います。しかも空海がその発想を得たのは、もともとサンスクリット語の文法からです。^(註44)

澤田 梵語ですね。

中島 梵語文法、サンスクリット語では compound（複合語）が簡単につくれます。

ドイツ語などをご覧になれば分かりますが、言葉をどんとつなげていきます。そうしたことがサンスクリット語でもあるわけです。空海は、声字実相を複合語だと言います。これは、声＝音、字＝文字、実相＝reality、の三つの compound で、空海はこれらを複合することで、われわれの实在＝reality に対する全く新しい考え方を提案してしまっただけです。それによって初めて仏の实在とはどういう意味かということ为空海は明らかにしてしまいました。われわれはこういう思想資源を持っているわけです。

澤田 ぜひ研究を広げていただきたい。

(註42) 伊勢神宮には内宮と外宮があり、内宮には天照大御神を祀る皇大神宮と荒祭宮などが、外宮には衣食住を始め産業の守り神である豊受大御神を祀る豊受大神宮などがある。

(註43) 曼荼羅とは密教の世界観を絵画で視覚化したものである。中でも、「同界曼荼羅」は、密教で最も重要とされる『金剛頂経』と『大日経』の世界観を表したもので、金剛界曼荼羅と胎藏曼荼羅をセットにしたものである。金剛界は悟りへの道筋を表し、胎藏界は慈悲の広がりを表すとされており、二つの曼荼羅があることによって一つの世界が表される。

(註44) 古代インド・アーリア語に属する言語であり、漢字文化圏では「梵語」とも呼称される。

中島 私は、こういったものが日本社会の底流にあるだろうという気がしています。無意識な底流だと思いますが、日本の会社も企業も、そういったものをうまく汲み上げながら実はやっているのではないのでしょうか。それは世界に対して打って出ることができると思います。

澤田 いけますね。出口康夫先生も中島先生と同じような立ち位置でご発言されます。仏教的なことや日本の昔からの議論と、出口先生はカントの研究者なので、カントの議論とが両立しているような。しかし、パラコンシストということについては、出口先生は、私ほどは言いません。

中島 私も出口先生にはいろいろ刺激を受けています。

出口先生が京都大学でアジア哲学のプラットフォームをつくろうとしている時期があり、頼まれて協力していたことがあります。ふと気づくと、出口先生はいつの間にかNTTさんといういろいろ研究していました。

澤田 アジアが世界になってしまったのですね。

中島 びっくりしました。一方でわれわれは世界哲学という運動をやっている世代でもあります。それまでの西洋中心の哲学のヒエラルキーをぶち壊そうと、日本やそれ以外の地域の哲学と水平的な関係が持てるような世界哲学です。

澤田 モナド、パラコンシスト。

中島 それをやろうと2020年にちくま新書から『世界哲学史』という本を9巻出しました。おかげさまで、あれが一定の評価を受け、日本からようやく新しい哲学的な問いかけが出てきたと言われています。出口先生もその仲間です。

4 産業界とアカデミアが対話するプラットフォームを

澤田 まだ固まっています^(註45)が、ぜひ京都會議を実現したいと考えています。それはまだステートメントを出せる段階ではなく、いろいろな分野を決めなくてはいいませんが、われわれが社会としてどういう方向に向かうべきなのかというものを、知的な世界の方や産業界の方が一堂に議論できるような場をつくりたい。入り口から難しいですけども。

中島 そうですね。でも、非常に意味のあるチャレンジではないかと思います。

澤田 アカデミアの中でもいろいろな考え方があり、産業界はまた産業界なので、平板な言葉で言ってもなかなかリンクできません。

中島 私はいつも突端同士が出会うしかないと申し上げています。みんなが出会うことはそう簡単ではなく、出会うためには準備と熱情が必要です。それなしには人と人が出会うことはありません。たぶん澤田会長と出口先生は、そういう突端で出

(註45) 京都哲学研究所所では、国内外問わず大学教授や産業界が京都に集まって、これからの社会について意見交換する国際会議を定期的に開催することを予定している。この会議を「京都會議」と称する予定で、第1回会議は2025年9月23日・24日に開催予定である。

会われたのだと見ています。

澤田 ただ、出口先生といろいろな議論をされているジェイ・ガーフィールド教授^(註46)やグラハム・ブリスト教授と私の意見が全部合っているわけでもありません。出口先生とは結構合っていますが、ここもまた難しい。中島先生が入っていたくと、またそこは全部合うわけでもないでしょうが、いろいろな輪、集合、先ほどおっしゃった入れ子ではないですが、いろいろな関係性や輪ができてきて、その重なり合った部分で何らかの方向がつけられればよいかな。そういう、いいかげんなことを考えています。

中島 この前、京都哲学研究所創設記念シンポジウムに伺って拝聴して、ここで大事なことは、日本哲学をきちんと再定義しようとしている人たちが入ったほうがいいなと思いました。

澤田 そうかもしれません。

中島 ガーフィールド先生はチベット仏教で、ハーヴァード大学のジェームズ・ロブソン先生^(註47)は禅仏教ですよ。

澤田 おっしゃるとおりです。

中島 他方で、日本哲学の可能性を掘っている方々、先ほど紹介したトマス・カスリス先生^(註48)とか、あとは京都大学出身のブレット・デービス先生が頑張っています。

(註46) スミス大学教授、ハーヴァード大学神学大学院客員教授。京都哲学研究所創設記念シンポジウムにおいて基調講演を行った。

(註47) ハーヴァード大学東アジア言語文明学教授、アジアセンター長。京都哲学研究所創設記念シンポジウムにおいてパネリストとして登壇した。

(註48) ロヨラ・メリーランド大学哲学科ヒギンズ寄附基金特別教授。専門はドイツ哲学・日本哲学・比較哲学。

いま、お二人の本の翻訳を私は出そうとしていますが、どちらも非常に刺激的で、見たこともない日本哲学を論じてくださっています。そういう力も借りながらやっていくと、本当に世界でも類を見ないプラットフォームになるのではないでしょうか。

実は、私も東京大学東洋文化研究所で、先端科学技術と哲学の対話のような小さなプラットフォームをいまつくろうとしています。PANEXT (Philosophy for New Enlightenment × Techne) というプラットフォームで、本当にごちんまりですが、たぶんできると思います。ここでも出口先生などとうまく連携させてもらったら、また面白い面が出てくるでしょう。

澤田 そうですね。一色ではないので、かなり heterogeneous に組み合わせるような関係性（さまざまな性質や種類のものが混ざり合っているような関係性）をつくれればよいと思います。それはたぶん連関（互いに関わりあっていること）だったり、あるいは並立状態（複数が対等の関係性である状態）だったり、いろいろな構造にはなると思いますが、そういう動きを取ること自体が一つの成果かとは思いますが。

中島 そうですよ。それは澤田会長に先陣を切っていただきました。

V 新しい指標

1 〈Human Co-becoming〉を測る指標の提案

澤田 ただ、産業界的な発言をすると、今日の対談では深く議論できないかもしれませんが、会計制度の問題があります。いわゆるフォーミュラといいますが、企業活動を規定するインフラが世界一色になっていることが問題です。

中島 会計制度は、とある事情があつて少し勉強してみました。そうして分かったのですが、最近の会計制度はESG投資のような倫理的な経済といったものを評価する指標を入れ込んでいく動きが出ていますね。

澤田 ファイナンスサイドにはその動きがあります。投資家の中では、利率が悪くてもESG投資のような観点を入れるのはよいのではないかという議論にはなりませんが、通常の、ESG投資をした一般オペレーティングカンパニーでは、その分、利益が落ちていないかという議論^(註49)になってしまいます。結局はマルクス・ガブリエル教授が言うような倫理資本主義^(註50)であれ、原丈人が言うような公益資本主義^(註49)であれ、会计学の中でそういう動きがあるとは聞いてはいませんが、ESG的なものを換算して入れるのだと思います。ESG的なものを税効果会計のように別に置けるとか、そういうテクニカルな議論はあまりありません。結局は利益を出してくれと言われてしまう。

(註49)「倫理資本主義」は、マルクス・ガブリエル(註36参照)が提唱する、倫理を経済活動の中心に置く資本主義の概念である。その具体的内容は『倫理資本主義の時代』(ハヤカワ新書、2024年)で明らかにされている。

(註50)「公益資本主義」は、原丈人(元内閣府参与)が提唱する、社会全体の利益を追求する資本主義の概念である。

中島 それは利益をどのようにカウントするか、を変えないと駄目ですよ。

澤田 おっしゃるとおりです。そこがたぶん、一つの出口でもあるような気はします。

中島 その中でも、NTTの方がfloweringの話をしていましたが、これは今の哲学でも非常に重要な概念です。徳倫理学はflowering^(註51)とかflourishingという言葉を非常によく使います。もちろん日本でも世阿弥^(註52)なども花の問題は非常に大事に取り上げていて、慶應にいた井筒俊彦は花に「する」という動詞を付け「花する」と言っています。

澤田 面白いですね。

中島 floweringのことを「花する」と言ってみる。これは人間にとっても非常に価値があることではないでしょうか。それは別に能力を最大化するとかではなく、先ほど、それぞれの文化は、襞^{ひだ}のように織り込まれ、入れ子状になった非常に複雑なあり方をしているという話を申し上げましたが、その襞^{ひだ}が十分に展開をしていくということを指します。それは、おそらく能力の襞^{ひだ}ではなく、何か正しい世界、良い世界を望む、希望の力が襞^{ひだ}として花開いていく。そういうものが人間にとって価値のある状態ではないでしょうか。

澤田 〈Human Co-becoming〉の状態を言うわけですね。

(註51) 徳倫理学は、徳に焦点を当てて「善」や「正しさ」を議論する倫理学の分野であり、この分野の起源はアリストテレスまで遡る。アリストテレスは、人が幸福になる、すなわち開花繁栄する(flourish) ために必要な特性が徳であると考えた。

(註52) 世阿弥は室町時代初期の猿楽師で、父の観阿弥とともに猿楽(現在の能)を大成した人物。世阿弥が観阿弥の教えを記した『風姿花伝』では、「秘すれば花」や「住する所なきをまず花と知るべし」など、「花」という言葉を美しさや魅力など複数の意味で用いている。

「花する」と言ってみる

「花する」という言葉は、言語学者・イスラーム学者・東洋思想研究者・神秘主義哲学者であり慶應義塾大学名誉教授を務めた井筒俊彦（1914年―1993年）の著書『イスラーム哲学の原像』（岩波新書、1980年）における記載に由来します。この本は、イスラーム神秘主義思想家であるイブン・アラビー（1165年―1240年）の思想を説明することを主題としたものですが、井筒教授はイブン・アラビーの思想を次のようにまとめています。

このメタ言語では「花が存在する」とは申しませんが、日本語としては妙な表現になりますが、「存在が花する」とか、「ここで存在が花している」とかいうような形でなければならぬのであります。とにかく、この哲学的メタ言語では、あらゆる場合に存在が、そして存在だけが主語になるべきであります。他のあらゆるものはすべて述語です。このように理解された「存在」、つまり絶対無限定な存在そのものを頂点において、その自己限定、自己分節の形として存在者の世界が展開する。イブン・アラビーの哲学的世界像を最大限に単純化して考えますと、だいたいこのような形になると思います。（井筒俊彦『イスラーム哲学の原像』、『井筒俊彦全集』第五巻、慶應義塾大学出版会、2014年、四九五―四九六頁）

中島　そうです。それをカウントできるような仕組みをつくったほうがいいのではないのでしょうか。

澤田　そうですね。

中島 それはたぶん、喫緊に求められている気がします。それも日本から提案できれば、今までの指標とは違うものが出てきたこととなると思います。

澤田 それはルールメイキングにつながっていきますね。

中島 そうだと思います。ぜひ日本発のそういうFlowering indexというものを出版されてはいかがでしょうか。

2 指標化のための営み

澤田 思想が必要ですが、そういう体系化をしていくという営みは続けなければいけないと思います。もちろん、企業一つでできる話ではありません。

中島 そう思います。一緒になって考えなければいけない。例えば禅などを考えてみても、悟るわけです。悟るとは、従来のあり方とは本当に違う境地に深く到達するということだと思います。しかし、それはある方法で計測できてしまうのではないのでしょうか。

ただ数値化しても仕方がないですが、ある方法を使い、ある準備をし、ある熱意があれば変わって、悟ることはできる。それを指標化していくことはとても重要ではないでしょうか。

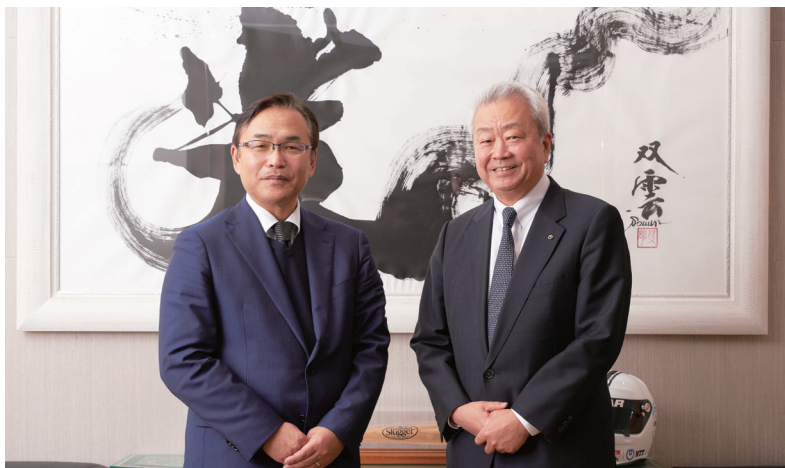
例えばお話をさせていただいて、最初始めたときのボキャブラリーと終わった後のボキャブラリーが大きく変わってしまった、あるいは、その方の発言の構文まで変わってしまった。そういったことが指標として測れば大きな変化がそこで出せたということですね。

澤田 そうですね。それは価値が伝わっているということでもあります。

中島 そういうことですね。それこそNTTさんの最も得意とするところかと思っています。

澤田 コミュニケーションの一形態です。おっしゃるように、そういう自然そのものの、あるいは知的な意思疎通、テレパシーとも呼べるでしょうが、そういうコミュニケーションを目標していかないといけない。いまのSNSは、単にテキストだったり、画像だったり、ショート動画だったりして、フェース・トゥ・フェースより情報量が少ない、あるいはゆがむ。だから、本質的に、離れていてもフェース・トゥ・フェースの状態を実現する。場合によっては、心、空気も伝える。中島先生がおっしゃったような価値が伝わるような部分を通じて、大きな変化を目指していく。

中島 考えてみれば、われわれも古い時代のテキストを読み、例えば空海を読むと、空海にもものすごく啓発されてしまうわけです。変容するわけです。これは驚くべき



左から中島研究主幹、澤田経団連副会長

ことです。しかし、空海は目の前にいません。目の前にいないのに、こちらが大きく変わってしまうことはよくあるわけじゃないですか。それが今の通信の技術でできないわけがありません。ずっとやってきたわけですから、それをサポートするようなインフラストラクチャーができれば全然変わってくるのではないのでしょうか。

澤田 人間の能力は、より becoming していくと思います。拡張できると思います。

VI 「パーソナル」を定義する

1 IOWN構想の衝撃

中島 御社のIOWN構想が、国からも大きな支援を受けるということを報道で目にしました。

澤田 関係している企業がすごく多いので、1社当たりは小さい額ですが。ともかく、一緒にやろうということで、アメリカはもちろんのこと、メモリー関係は韓国も入ってやろうというようになっています。

中島 よくIOWNと名付けられましたよね。

澤田 これは、当時研究所のリーダーだった弊社の副社長の川添と2人で話して決めて決まったんです。IOWNはInnovative Optical and Wireless Networkですが、最初ひっくり返っていてIWONだった。「私は勝った」というような。「それはちよつとな」と2人で言っていたら、ひっくり返りました。それでIOWNと名付けたら、結構西洋の方には受けがよいです。

中島 もともとギリシャ語ですからね。ギリシャ語でクロノス(Chronos)は使いますよね。「時」を表す言葉です。

澤田 時の神ですね。

中島 アイオーンはクロノスと異なる別の「時」です。永遠と訳す人も多いですが、

クロノスではない別の「時」です。

澤田 そういう意味ですか。それは意識していなくて、神としか理解していませんでした。名付けた後で川添が「澤田さん、えらいことだ。I O W N ってすごい意味です。神の意味です」とか言っていました。

中島 神様ですが、クロノスとは違う時の神で、別の時空に開かれるものです。

澤田 I O W N と言うと欧米の人に受けがよいです。

中島 それはたぶん皆さん、クロノスとは違う「時」のことを考えているからですね。

澤田 人間はすごいですね。良い印象になってしまう。

中島 どこまで意図されたのかは全くわかりませんでした。

澤田 意図はありませんでした。

中島 これはすごいネーミングだと思いました。

澤田 最初から海外の人を入れると、実は障壁が入りやすいのですが、このご時世ですから、ファンデーション自体はアメリカにつくりました。逆に、日本につくったらアメリカは来てくれないと思います。そうすると結果的に、中国が来られない。中国は同じようなことを7〜8年前にやっていました。ギブアップしている部分もあるようです。結果的に、入っているのは台湾企業です。

中島 ゲームチェンジャーになるのではないかという気もします。

澤田 うまくいけばそうなると思います。手前のものまではできているので、2028年に出す次のバージョンがうまく実装していけるか、製造技術の問題になってきます。

中島 2023年からはなさっていますね。

澤田 ファイバーのほうは最初のバージョンをつくりましたので、いま私が言ったのは半導体のほうです。ファイバーは今まで電気変換をしていた部分をやめ、全部光で直結させて、これをどんどん広げると全部に量子暗号がかかります。つまり、今までは回線ベースで提供しているものが、波長ベースで、あなたはA波長、あなたはB波長、というようになります。

中島 パーソナライズできる。

澤田 できます。将来はそれを狙いたいと考えています。レーザーなので波長開発をすれば、通信に使える波長が増えるので、パーソナライズ化も可能になるということです。

OWNの技術とパーソナライズ化

OWNでは通信の過程すべてを光によって実現することを目指しています。

光は波と粒子の両方の性質を併せ持つており、この粒子としての側面を活用したものが量子暗号です。粒子は途中で盗まれ覗き見されると性質が変化するため、原理的に盗聴が不可能となります。一方、光は電子の振動がくりだす波としての側面を持ち、波の長さを表す「波長」は光の「色」と言い換えることができます。例えば、700ナノメートルの波長が赤色、555ナノメートルの波長が緑色となります。また、1本のファイバーを使って同時に多数の波長を伝送すると波長が混ざる、例えば赤色の波長と緑色の波長が混ざって黄色の波長になったとしても、送った先でまた赤色と緑色に分離するというのが可能です。そうすると、1本のファイバーで多数の波長を同時に伝送する大容量通信が可能になります。これらの技術も使うことで、パーソナライズ化が可能になるといえます。

2 「パーソナル」の新解釈の必要性

中島 私はこれに二重の衝撃を受けています。一つは、一人がひとつ波長を持てるということですが、もう一つは、そこで「パーソナライズ」という言葉をお使いになつていたことです。「プライバシー」ではない、「プライバタイズ」するのではないわけです。「プライバシー」は、ある種の所有権の問題と関わってしまっています。しかし、それとは違う方法で一人の人間をつかまえる言葉は何があるのだろうかと私もいろいろ悩んでいます。人をつかまえるときに、この人をどうつかまえるかはすごく難しい問題だと思います。哲学ではそれを個体化の問題と捉えており、最重要問題のひとつです。これはいまだに良い答えがありません。しかし、「パーソン」

はひとつの良い例ではありません。

澤田 「パーソン」は単位ではありません。I O W Nの面白いところは光をアナログで捉えていることです。今まではデジタルですから粒で捉えていましたが、光は粒であり波ですから、両面をうまく使おうという概念です。波だから色で、パーソナルの概念でいうと、十人十色なということです。個人は波長を持っているところにつながるような気はします。

中島 これまでのパーソナルにはキリスト教、神学的な含意がありました。それを外し、全然違う仕方でパーソナルを定義できるのではないか。こうした希望を見せていただいたと思います。私はそれがすごく新鮮で、ここでこの言葉をお使いになるのかと衝撃を受けました。

澤田 工学的に言くと、周波数^(註53)ということかもしれません。

中島 すごく面白いです。哲学ではsingularity^(註54)（特異性）と言います。この問題をどうつかまえるかは、すごく厄介です。特異なのだから、1、2、3と数えられないでしょうと一方では言わなければいけません、しかし他方で、1、2、3と言えないと特異とすら言えない。

澤田 そうですね。認められないですよ。

中島 その緊張の中で、このもの、この私、をつかまえる概念をずっと探していま

(註53) 周波数は波長の逆数であり、波長と同じ意味として考えてよい。

(註54) あるものが他のものと比べて持つ独自の特徴のことを意味し、「普遍性」に対する概念といえるが、「個性性」とも異なる概念である。

す。数学を使って近傍だと言ってみたりしているわけです。しかし、何らかの形で、このもの、この私、がたぶん想定できるだろうということは言われていて、でもそれは変化するのだとも言われている。

澤田 動的变化ですよ。

中島 スタッとしたものではありません。

澤田 だから波です。動的というのは波ですから。

中島 それをIOWN構想では表現なさっているの、一番難しいところをお書きになったなと思いました。

澤田 よく勉強せずに感覚で書いているだけです。

中島 これはうまく神を外したなと思います。井上哲次郎^(註55)は、「パーソナル」を「人格」と訳しましたが、その際に、「格」は「神格」の「格」とつながってしまった。それを本当に外して「パーソン」という言葉をもう一度日本語に翻訳しなければいけない。それが大事です。まだわれわれは「パーソナル」というカタカナで話していますが、これを日本語にどう落とすかが次に問われています。波とおっしゃったのは、そのとおりだと思います、大変に興奮しました。

澤田 ありがとうございます。^(註56) singularity の議論も、私は俗に言われている singularity は来ないと考えています。ただ、計算能力としてはもう来てしまっ

(註55) 井上哲次郎(1856年ー1944年)は、東京帝国大学において日本で初めての哲学教授に就任した人物である。西洋哲学とりわけドイツ哲学を日本に導入し、東洋哲学を講じ、哲学用語の翻訳と解説を行った。

(註56) ここでの「singularity」は「技術的特異点」、すなわち人工知能が人間の知能を大幅に凌駕する時点という意味合いである。

います。どういう言い方をするかは難しいと思いますが、われわれはまだ人間をつくれませんので、人間とは何かという哲学的な問いのときに、技術的進展レベルに応じてエンゲージメント的な言葉を用意していただくと、社会的には分かりやすいかもしれません。

中島 だから対話が必要だと思います。いま私が東京大学の中につくろうとしているのは、そういう対話のプラットフォームです。最先端のテクノロジーや科学が何を考えているのか、それをこちらが引き受け、言葉にし直さなければいけない。そういう責務が Humanities（人文学）には絶対あるだろうと思います。そうでないと、適当に科学技術が進んでしまい、手に負えない可能性があります。

澤田 従来のニュートン力学と違って、既に量子力学の世界が研究されていて、感覚的に理解しにくい現象が起こっています。

中島 あらためて人間とは何かということが問われなければなりませんね。

澤田 それが大事だと思います。

中島 『パラコンシステント・ワールド』は本当に哲学的に面白かったです。

澤田 ありがとうございます。直感だけの話ですけど。

今日は本当にありがとうございました。

中島 こちらこそ本当にありがとうございました。

対談者略歴紹介（敬称略）

澤田 純（さわだ・じゅん）

日本経済団体連合会 副会長／日本電信電話株式会社（NTT）取締役会長
京都大学工学部卒業後、1978年に日本電信電話公社（現 NTT）入社。エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ取締役経営企画部長、同社代表取締役副社長、日本電信電話代表取締役副社長などを歴任し、2018年に代表取締役社長に就任。2022年に代表取締役会長に就任し、2024年6月より現職。日本経済団体連合会副会長（産業競争力強化委員会委員長、アメリカ委員会委員長）、日米経済協議会会長、京都哲学研究所の共同代表理事を兼ねる。主な著書に『パラコンシステント・ワールド－次世代通信 IOWN と描く、生命と IT の〈あいだ〉』（NTT 出版、2021年）、『IOWN 構想－インターネットの先へ』（共著、NTT 出版、2019年）がある。

中島 隆博（なかじま・たかひろ）

21世紀政策研究所 研究主幹／東京大学東洋文化研究所 所長
東京大学法学部卒業、ハーヴァード大学イエンチン研究所客員研究員、パリ第8大学客員教授、東京大学東アジア藝文書院院長などを経て2023年より現職。2024年12月より東京大学出版会理事長も務める。博士（学術・東京大学）。近著に『全体主義の克服』（マルクス・ガブリエル共著、集英社新書、2020年）、『中国哲学史－諸子百家から朱子学、現代の新儒家まで』（中公新書、2022年）、『日本の近代思想を読みなおす1 哲学』（東京大学出版会、2023年）などがある。

特別対談

日本的な感性を活かした 多様性ある社会の実現

2025年3月31日発行

編集 一般社団法人 日本経済団体連合会
21世紀政策研究所

〒100-8188 東京都千代田区大手町1-3-2

TEL 03-6741-0901

FAX 03-6741-0902

ホームページ <http://www.21ppi.org>



21世紀政策研究所

THE 21ST CENTURY PUBLIC POLICY INSTITUTE